

# 三代目・木村半兵衛の日記（明治八〜一八年）にみる年頭の諸行事、年中行事（国の祝日、宮中行事）、地元神社の祭礼等に関する考察

麻生千明

元・足利大学教授

## Consideration about New Year Events, Annual Event and Festival Event of Local Shrines Revealed of Third Generation KIMURA HANBEI's Diaries Meiji 8~18

Chiaki ASOH

### Abstract

Great Commerce HANBEI KIMURA, Tird Generation, living in Omata Village have left Several Diaries in Early Meiji-Era. Everyday's Events are Recorded in those Diaries. This Paper consider about Annual Event, for Example New Year's Event, National Holidays, Imperial Events, Festival Event of Local Shrines revealed in his Diaries from 8year to 18year of Meiji-Era. New Years Greet continued until March or April. Among Imperial Event, on Emperors Birthday Many School Teachers Get Together and Held a Banquet. Festival Event of Local Shrines were Conducted on Fixed Day. Especially Festival of YAGUMO Shires was Very Busy.

**Keywords:** HANBEI KIMURA's diaries, Annual event, Local Shrines Festival

### はじめに——木村半兵衛の日記について——

小侯が生んだ豪商木村半兵衛（三代目）は、織物買継商として活躍するとともに、明治六年（一八七三）三月、学区取締に任命され、地元の教育の振興に尽力する。その後、彼は明治一〇年（一八七七）九月には学区取締を辞し、それと前後して第四十一国立銀行（栃木本行および足利支店）の開業に尽力、明治一一年の開業（九月 栃木本行、一〇月 足利支店）以後は特に足利支店へ

の銀行勤務の日常となる。ところで木村半兵衛は、明治六年以降、亡くなる明治一九年まで毎年日記を書き残している。明治六年の日記は『學區日誌』、明治七年の日記は『學務雜誌』と表記されており、その二冊は目付のもとにその日の行動等の記録があるが、専ら学区取締としての任務に関する内容で、表記が示すように教育関係の資料集的な性格のものである。しかし明治八年以降の日記は、横長の小さな体裁のものとなり、記述内容も月日、天候、気温（華氏）等を記したあと、その日の日常生活が記録されており、まさに日記スタイルの

ものとなる。したがってそれらの日誌は明治前半期の木村半兵衛および家族の日常生活とともに、当時の栃木県小俣村をはじめ足利地方の人々の生活や社会の風俗習慣等を窺い知り得る貴重な資料と言えるよう。

ところで木村半兵衛の日誌については、平成一九年（二〇〇七）、木村半兵衛家文書整理調査会会長、日下部高明氏のもと菊地卓、堀江英夫、鶴淵康弘、柏瀬順一の諸氏と私が足利市の委嘱事業として日誌の翻刻作業を委託され、平成二二年三月に半兵衛の明治六年から九年までの四年分の日誌の翻刻と補注、および解説をまとめた報告書<sup>(一)</sup>を公刊した。（以下、本稿の明治八・九年の日誌の引用は同報告書による）さらに明治一〇年分から二二年分までの日誌については、メンバーには変遷があったが、足利工業大学の紀要『東洋文化』に連載<sup>(二)</sup>、（明治一〇～一二年の日誌の引用は同紀要各号による）、明治一三年分以降の日誌については、麻生の足利工業大学の定年退職に伴い、足利市教育委員会文化課の印刷製本による小冊子を僅部数公刊、近隣の図書館等に寄贈してきている。（明治一三～一七年の日誌の引用は同冊子による。明治一八年分については二〇二〇年一〇月刊行予定）。また半兵衛の学区取締としての活動——寄付金の徴収、学校の設立、就学奨励、教員の任免、各学校における進級試験の実施等——についても前掲『東洋文化』に論文を五本連載した。<sup>(三)</sup>

ところで私は、明治八年以降、一八年に至る約一〇年間の半兵衛の日誌全体を通覧して、いくつかのテーマ、観点からまとめてみたいと思いついた。そうした意図のもと本稿では半兵衛の日誌を資料に、年頭の諸行事、年中行事（国家の祝日、宮中行事）、地元神社の祭礼等について考察することにする。

## 一、年頭の諸行事

半兵衛の各年の日誌の最初には、新年初頭の宴会や年礼など諸行事の様子が記されている。したがってまず年頭の諸行事について考察することにする。

まず明治八年の日誌（『明治八年一月ヨリ同 十二月廿一日ニ至 雑記』は、一月に関しては「一月一二三日晴」と三日の天気と「一月十五日出縣十九日帰村」との記述があるのみで、年初の諸行事、出来事に関する記述はない。

### （一）明治九年：元日に家々で国旗を掲揚、新年祝宴、年礼

明治九年の日誌（『明治九年一月 日誌』）では一月一日は「映晴清和 御国旗竿頭二輝々揚々皇風蒼生ヲ撫育ス微臣遥ニ拝 東京城 村内総年甫禮於学校自午前十時至午後四時濟ム用係一同川上氏子供ニ於山木樓祝酒ヲ汲ム午後八時過一同退散ス」と詳しい記述がある。すなわち元日は家々で国旗を掲揚し、東京城（皇居）を遥拝し、日中は学校において「村内総年甫禮」がおこなわれ、夕刻より地元の料亭山木楼（山木屋）で祝宴が開かれている。

ここで国旗について若干言及したい。明治三年（一八七〇）一月二七日、日の丸の旗を国旗とする太政官布告（第五十七号）が公布された。これは、旧幕府が嘉永七年七月九日「日本惣船印」として定めた「白地日の丸」を踏襲したもので、規則の上では「商船規則」の一部に「御国旗」として定められたものである。大きさは大・中・小の三種を用いることとした。また明治三年から六年にかけて陸・海軍の国旗も別に定められていたが、明治二年までにいずれも廃止され、この商船国旗だけが今日まで国旗として使用されている。<sup>(四)</sup>

翌二日も「七小区扱所年禮区内村用係不残出頭予モ出席祝酒ヲ設ク午後四時退宅ス」と、地元「七小区扱所」で区内の村用掛等全員出席して祝宴が開かれている。ここで「七小区」について説明する。当時、栃木県は県南の栃木県と県北の宇都宮県の二県体制であったが、栃木県が九つの大区に区画、半兵衛は足立至徳とともに第六大区（足利郡と梁田郡）担当の学区取締に任命となる。そしてその第六大区が七つの小区に区画されていた。そのうちの「七小区」は、今福村、大岩村、五十部村、山下村、大前村、葉鹿村、小俣村、栗ノ谷村、板倉村、松田村の一〇カ村で、半兵衛の地元である。

五日は「足利市立アリ芳賀永之助氏年甫禮ニ立寄：」と足利町の「市立」（いちだて）、すなわち織物市が開かれ、芳賀氏が年礼に訪れている。続いて「敬三寺院四力寺年禮ニ遣ス無長鶏醫々四寺」とあるように半兵衛の二男、敬三を地元四力寺に年礼に遣している。「無長鶏醫」とは無量院、長福寺、鶏足寺、醫王寺の四力寺の略記である。敬三はよく半兵衛の代理で年礼に遣わされている。

七日は「商法店卸祝酒一同へ馳走ス」と木村商店の「店卸」で従業員一同に祝酒を振舞っている。八日は学校開業日であるが、「学校教員川上氏三科氏牧島氏桜井氏森山氏等へ山木屋におゐて祝酒ス」。当時、半兵衛は学区取締を務めており、学校教員たちとの交流も多くみられた。一日も「佛曉乗車足利町へ赴ク渡世瀬橋上ニオイテ第十大区本校教員十九名出會足立木村都合廿一名新禮恭賀供ニ祝ス後午後四時頃ニ至祝酒宴ヲ開ク午後七時衆一同退散」と教員連と新年祝賀の宴会をおこなっている。そして一四日は「足利草雲先生年始ニ来」。「草雲先生」とは画聖・田崎草雲である。三十一日は「忠三郎文助在所へ年始ニ行」。二月に入っても一日は「小泉兵八郎相場氏年始ニ来」、一九日は「母敬三足利△猿田大沼田へ年始禮代に遣ス」と年礼での往来がみられた。

### (二) 明治一〇年：地元の料亭山木屋で新年の祝宴、年礼

明治一〇年の日誌『明治十年一月 日誌』には、一月一日は「小俣村葉鹿村両村事務所ニオイテ一般ノ年禮ス午後四時頃ニ至山木屋へ参集新禧ノ賀筵ヲ開キ衆人大酔セリ両村伍長込人員凡三十一人」と小俣、葉鹿両村の事務所において一般の年礼がおこなわれ、午後四時頃から料亭山木屋において「新禧ノ賀筵」が盛大に開かれ、「衆人大酔セリ」と記されている。二日は「区務所年禮へ出張ス」。五日は「足利市立」すなわち足利での織物市、七日は「店卸済夜一同へ祝酒ヲ振舞ス」すなわち木村商店の店卸で従業員一同に祝酒を振舞っている。八日は「学校開業教員其外へ山木屋ニ而祝宴ス」。毎年、学校開業日は教員連が山木屋で祝宴を開いている。また同日は足利町より相場朋厚と小泉兵八郎が年礼で半兵衛宅を訪れている。翌九日は「渡邊道圃氏年始ニ来ス」。渡邊道圃は木村家お抱えの医師として毎月定日に来診を約束した人物である。一〇日は「足利年禮敬三遣ス」と足利町の親戚知人宅への年礼に敬三を遣わしている。一七日は足利町から「小杉虚東氏年礼ニ来ル」。二〇日は「勇三東京年禮行兼二郎供」と長男の勇三を東京に年礼に遣わしている。

二月一日は学区取締としての仕事始めといえる「開業式」が栃木師範学校で挙行、当日は全員礼服を着用して参加、「縣令公始学務課一同出頭ス」。開

業式は午後四時頃に終了、「夫△赤飯重祝酒アリ」と祝宴が開かれている。

### (三) 明治一一年：半兵衛家の新築祝い(わたまわし)

明治一一年の日誌『明治十一年一月 日誌』には、年頭の四日間には雨天で特に年礼等の記述はない。三日は「桐生市立」、五日は「足利市立」と桐生、足利で織物市、六日は、木村商店の番頭格の使用人、下瀬文七の婚儀、七日は「商店ニ卸計算祝酒一同へ賜」と木村商店の従業員一同に祝酒を振舞っている。

なおこの年の一月は木村家の新築が完成する。明治九年の九月下旬から一〇月にかけて本家の取り崩し作業が行われており、一〇年二月五日は「宗家上棟」、三月下旬には瓦葺き、六月一日には「宗家雪隠上棟ス」、八月には戸樋廻り、一〇月には座敷の工事、そして二月には新築もほぼ完成したようで同月三〇日には「長屋△本家新築へ移ル」とある。そして明治一一年に入り一月五日は「坐舗上棟ス」、九日は「座敷土居フキ落成ス」。そして一日は「新築造営移禮祝酒村内ヲ呼ブ」と、大勢の村人を招いて新築祝の酒宴が開かれている。翌一二日は「桐生足利乃宿役員其外凡三十人余招ク見せ二十人其外共△六十人余午後五時不殘退散ス」と、桐生、足利、小俣宿の役員等、約三〇人、その他店員等二〇人、総勢六〇人余を招いて盛大に祝宴を開いている。さらに翌一三日は「親類及ヒ職人一統凡三十人酒宴：△移住祝酒午前十一時△午後八時ニ至」と親類や職人等、約三〇人を招いて午前十一時頃から午後八時頃までの丸一日、祝宴が開かれている。翌一四日は「祝酒奥一同へ出ス跡仕舞等迄無滞済」と従業員一同に祝酒を振舞い、数日間わたる新築祝いの酒宴も滞りなく終了している。この新築祝いのように、村人たちを大勢招いて数日間わたって行われる人寄せのことを当地方では「わたまわし」等と称していた。(五)

新築祝いを終えて一五日は「鶏足寺 年始来臨」、翌一六日も「鶏足寺當持明院年始ニ来ル」。二〇日は老母の本葬を明日に控え親戚が参集、二二日本葬と出棺、二二日は初七日供養がおこなわれている。

二月に入り二日は半兵衛自身が「獨歩足利行廣瀬氏小杉氏和洋舎支店等へ年禮ス」。翌三日は「敬三供敬介桐生新宿年禮ニ遣ス」。四日は「正午過△敬三供

敬助葉鹿村<sup>ハ</sup>始メ足利へ年始ニ遣ス。九日には「大堂 半次 兩人 大入<sup>ハ</sup>叶花<sup>ハ</sup>彦谷等へ歳暮并年始ニ出張ス」。当時は歳暮と年始の挨拶を兼ねて行うことも少なくなかった。なお年頭の行事ではないが、三月一九日は「明十郎誕生祝ス赤飯酒肴ヲ以 川上 出半 鈴木 皆川 四氏 余 勇三 都合六人」と、四男明十郎の満一歳の誕生祝いの酒宴をおこなっている。

ところで木村半兵衛は、明治一〇年九月に学区取締を辞し、それと前後して第四十一国立銀行の設立に尽力するようになる。株主など協力者を募るべく県内をくまなく巡回し、明治一年九月八日に栃木本行、翌一〇月一日に足利支店が開業される。当日の日記に「第四十一国立銀行足利支店開業國旗ヲ揚祝ス本日株主足利最寄一同ヲ招待ス」と、足利支店開業式の模様が記されている。

#### (四) 明治一二年：銀行開業後、一月は銀行での祝宴、二月は木村商店での祝宴

明治一二年の日記(『第十二年 日記』)には、一月一日から四日までは「映晴」との天候の記述のみで、五日は「足利市立」すなわち織物市、同日から一日までは栃木本行に勤務、翌一二日は「令公始大書記官宅へ年禮ニ出張ス及白石君宅へ同断渡邊邁君全」と藤川為親県令、大書記官、学務係白石磨、渡辺邁等の各氏宅に年礼に赴いている。翌一六日は「第四十一国立銀行株主總會」が行われる。翌一七日は県令はじめ県官等臨席のもと「本行開業式」が挙行され、終了後「株主一同へ祝酒ヲ出ス大宴會午後八時ニ及首尾克終會」と、銀行開業後初めて迎える新年の開業式と宴會が盛大に挙行されている。

そして二月に入り、二日は「商店店卸祝酒一同へ饗ス」と木村商店の「店卸」で一同に祝酒を振舞い、四日は「夜奥一同へ祝酒馳走ス客 川上 鈴木 出半 全作 清三郎 余 勇敬三 お久 半二郎 おみき 孫七人 職人五人 下女 下男 廿 都合三十式人」と家族や従業員等、総勢三十二人に祝酒を振舞っている。「勇敬三」は「勇三」と「敬三」をまとめた表現である。五日は「午前九時粕川宗造氏同伴十一時頃カス川村安着ス同家へ年禮致し：こ親戚の粕川家に年礼、さらに埼玉県本庄の半兵衛の生家・内田家に到着、翌六日は「本庄内田両翁無事」を確認し午後三時に帰宅している。九日には「猿田村 小泉

氏 長氏 年禮シテ佐野正田氏へ立寄：」とあるが、小泉兵八郎は半兵衛の親戚で銀行役員をも務めている。「長氏」すなわち長四郎三は廻船問屋である。一九日は「新川村吉田貞助氏年始ニ来臨」、その返礼として二日に「新川吉田両家へ年禮ス」。三月四日には大原村へ廻り「阿部加藤両氏年禮」。このように三月に入っても親戚、知人等への年礼での行き来がみられた。

#### (五) 明治一三年：正月三日に年始状の投函、四月頃まで続く年礼

明治一三年の日記(『十三年一月 日記』)には、一月一日は「映晴有風紅旭風ニ翻飈タリ然シ松飾ノ家ハ村内 川上 鈴木 出半 山木 其余ハナシ」と元日には各家に「紅旭」(国旗)が掲揚されていたが、「松飾」、すなわち門松等を飾っているのは村内でもわずか数軒だったようである。二日は「小泉相場足利より年始ニ来臨倉林傳二郎氏臨ス川上鈴木両氏供ニ祝宴ヲ開キ松本宗禎氏倍席琴ヲ弾ス」とよ しむ 全 午後四時過開席ナス」と、年礼での来客が相次ぎ、また盛大に新年の祝宴を開いている。琴の弹奏等もあり、実に華やいだ雰囲気うかがわれる。「開席」とはいわゆる「お開き」で閉宴のことである。琴を弹奏した松本宗貞(操貞)は、弘化三年、上州邑楽郡堀工村生まれ。五歳の時、痘瘡で視力を失う。一〇歳の時、江戸に出て本所の鍼灸塾で箏曲、三弦、鍼術を学ぶ。明治初年、足利に来て漢学、和歌を学ぶ傍ら箏曲、三弦、和歌の指南を業とした。その後、盲人教育の分野で活躍する。

#### ① 年始状(年賀状)の投函

ところで明治一三年の日記で注目されるのは、一月三日に「年始状端書郵便十七通發状ス姓名左ニ」として東京や横浜の親戚、知人、慶應義塾、第三銀行など年始状の送付先一七カ所が列記されていることである。「端書」とは「葉書」のことである。日本では古来、年の始めに親族はじめ世話になった人、近隣の人々の家を訪れ、旧年中の交誼を感謝し、新年の挨拶を述べる「回礼」は古くからおこなわれてきた。半兵衛の日記にも年礼は盛んにみられた。年始の挨拶でお互いの家の行き来する元旦風景は、大正時代頃までよくみられたという。

なお、時には面会して祝儀を述べ合う煩わしさを避けるため、玄関に名刺受けを置いたり、礼帳と筆・硯を置いて訪問者はそれに署名するなど、簡素化した応対も行われるようになったという。

そうした年始の礼は、親戚知人間、近隣社会、職場関係等、人々の心のつながりを強める効果はあるが、社会の進展に伴い交流する人々や地域が拡大するにつれ、お互いに直接出向いて挨拶を交わすことは困難ないし不可能になってきた。したがって年礼に出向く代わりに年始状（葉書）を送る慣習が広がっていくことになったのである。もともと書状は古代、中世の時代からみられた。一世紀中頃（平安後期）の藤原明衡の書いた年始状も残っているというが、古代、中世において書状を書けるのは一部の貴族や武士に限られていた。一般庶民の間に識字能力（文字の読み書き能力）が普及し、国民の多くが年始状を交換するようになるのは、明治以降、学校教育が普及し、国民の識字能力が向上し、かつ郵便制度が整備されて以降のことと言える。

郵便制度は、明治四年（一八七二）、前島密が創業したが、明治六年（一八七三）に日本最初の郵便葉書が発行され、手軽に近況を伝えたり、緊密な人間関係を維持するために広く利用されるようになった。なお年始状は、現在は遅くとも正月数日前に書いて投函、元日に配達されるようになったが、半兵衛の日誌にもうかがえるように、明治初期当時は正月を迎えてから三カ日に賀詞をしたためて投函するのが一般的であった。半兵衛の日誌によると、一月三日に書いている。その後、元日明けに殺到する年始状の取り扱い策として、明治三二年（一八九九）一月、一部の指定局で年賀郵便物の特別の取り扱いを開始、一月二〇～三〇日までに指定局で引き受けた年賀郵便物には一月一日の日付印を押して配達局に送り、元旦以降に配達するようになったのである。それが明治三八年（一九〇五）一月には一部の指定局だけでなく全国の郵便局で取り扱われるようになった。そして翌明治三十九年（一九〇六）には「年賀郵便特別郵便制度」が公布され、制度が確立した。さらに戦後の昭和二十四年（一九四九）一月一日、敗戦で疲弊した社会の復興と福祉の意義を込めて「お年玉つき年賀はがき」が発行されるようになり現在に至っている。<sup>6)</sup> もっとも最近は、

若者を中心に手紙離れ、年賀状離れの傾向が進行しており、メールやライン等で済ます傾向が顕著となっている。

## ②三〇四月頃まで続いた年礼

明治一三年の日誌の続きをみていくと、一月五日は「足利市立」の日でもあるが、日誌に「足利銀行へ出勤ス営業繁忙夜六時半終業祝酒 肴三種 社員 小泉前田 中村 給仕 余トモ都五人」と足利支店で業務終了後、社員たちと祝宴を開いている。七日は栃木本行に向かう途中、「佐ノ正田氏年始ニ立寄午飯酒肴馳走ニナル」。同日、栃木町の志鳥半兵衛旅宿に到着。翌八日は銀行役員、正田、鈴木、中島らと共に「安田為替方へ年始ニ参ル」。一〇日は「板倉重平宅へ正田鈴木中島余都合四名年始トシテ出張」。翌十一日は「本日株主總會及利益金配賦致ス」。そして株主總會終了後「夜七時社員一同十一名銀行にて新年宴會イタス」と社員一同で新年宴會が開かれる。続けて日誌には「壺屋仕出し十一名前代金五圓渡外ニ上等三升 茶むし さしみ 焼肴：」と仕出し屋から取り寄せた料理の種類や代金等までが記されている。

二月に入り一日は家族・親族、従業員等大勢が一堂に会し「宗家新年宴會」。日誌には参列者の氏名も列記されている。そして以降は年礼や商用等での行き来がみられる。一二日は「東京より廣瀬幸作来臨ス年始ナリ」。十四日は「午前九時年始ニ出張ス杵山両家石井直平森謹須良大繁ナリ：母ハ午前七時乗車足利松本宗貞宅へ年始歳暮ニ而罷ル」。半兵衛は杵山両家、石井直兵衛（直平）、森山謹一郎（森謹）、須藤良平（須良）、大川繁右衛門（大繁）など地元小俣村の有力者宅に年始に出向いている。一九日は「新川吉田氏へ年始ス」。二二日は「午前九時乗車十二時過粕川氏へ年始トシテ立寄午飯酒肴馳走ニナル」と親戚の粕川家に年始挨拶で立ち寄り、昼御飯を馳走になり、その後、半兵衛の生家・本庄の内田宅を訪れ宿泊、翌二三日は「内田本家 戸谷氏 日向、酢屋 等ニ年始イタス」と本庄宿付近の複数の知人家に年始挨拶で廻っている。

三月に入っても、五日は銀行足利支店に勤務終了後、「足立氏宅へ年始ニ罷越酒肴馳走ニナル」。「足立氏」とはかつて学区取締を共に務めた足立至徳である。



林源三郎は、一九日に見舞いに来た小林おとく子の夫である。その返礼として翌二月の一日に「きね緑町小林氏へ年始ニ参ル」。半兵衛は病床にあったので、勇三の嫁きねを年礼に遣している。

半兵衛は五月一〇日に約半年間に及ぶ東京での療養生活を終えて小俣に帰宅する。よほど嬉しかったようで当日の日記に「闔家一同安全喜躍ニ不堪也」と記している。そして同月一六日には「余全快祝赤飯及壽留女配ス」と全快祝いに赤飯と壽留女(するめ)を振舞っている。「するめ」は古来、わが国では祝儀に用いられてきたが、「お金をスル(盗む)」の語を連想させることから、その後、一般には「あたりめ」と言うようになったという。翌一七日は「相場朋厚氏小泉吉太郎氏一元及年始旁来臨岡田平兵衛来臨同席馳走ス」。五月ではあるが、相場等は、半兵衛の東京での療養中に見舞いと年始挨拶に行けなかったのである。年始挨拶も兼ねての来訪であった。

#### (八) 明治一六年：銀行社員に年玉を与える

明治一六年の日記『十六年一月 日記』には、まず一月一日は「美晴晴朗 闔家無事於戸長役場年礼」と、快晴にも恵まれ、家族も無事健康で、戸長役場で年礼がおこなわれた。二日は「田野俊貞氏川島廣瀬年禮ニ来臨ス」と、医師の田野俊貞、川島長十郎、広瀬孝作が年礼で訪れている。三日は「足利小泉兵八郎氏年禮ニ来臨」。五日は仕事初めの日で、「午前八時足利銀行へ出勤社員小関 前田 長 今尾 内田 五名へ年玉トシテ金壹圓ツ、給仕四郎へ五十弍遣ス」と銀行の社員たちに年玉として金員を与えている。続けて「同夜田野氏相場氏等へ年禮ス」と医師の田野俊貞氏と相場朋厚氏に年礼に赴いている。六日は「猿田小泉氏及長四郎三氏石喜等へ年礼イタス午前十時頃足利郡長氏へ年礼ス〇午後三時頃小泉兵八郎同伴飯野弥市氏へ年礼」と一日中、猿田村をはじめ多くの知人宅に年礼で足を運んでいる。九日には勇三の妻きねが女兒を出産するという祝事があった。一三日は栃木本行に勤務後「同夜縣内為替方へ年始ニ正田氏共ニ参ル 酒肴馳走ニナル鈴木氏倍食ス」と銀行関係への年礼に赴いている。「鈴木氏」とは銀行員鈴木要三で「倍食」は正しくは「陪食」と

書き、食事の同伴(お相伴)をすることである。一四日は「株主總會及利益金配當致ス午後四時散會夜ニ入社員一同宴會」と株主總會がおこなわれ、終了後、夜は社員一同で新年宴會を開催している。例年、一月中旬に栃木本行で株主總會が行われ、終了後に新年宴會が催されている。一五日は栃木本行に勤務後「午後二時過 中田 白石 両氏へ年禮ス」。二六日は小泉家に嫁いだ、半兵衛の三女しむが女兒を出産、二月一日にかつが小泉家にお産見舞いに出向いている。二月一九日は「午前桐生町阿部佐兵衛氏年始ニ来ル」。三月に入り三日は上京の途次、上州の親戚「糟川氏へ年始禮ニ立寄酒肴馳走ニナル」。四月に入り八日は「さた子初酒宴闔家一同及知己男女ヲ招ク」。勇三ときねの間に一月九日に誕生したさた子の誕生三カ月を祝して酒宴を開いている。一九日は「午十二時前吉田賢太氏年始及外孫女祝かね来臨」と吉田賢太郎が年始と孫女誕生祝いを兼ねて来訪している。その返礼として二二日に「新川吉田両家へ年禮致ス」。なお同日は新川に行ったついでに「大原阿部及加藤氏へ年始ニ立寄」っている。このように、年礼で訪問を受けると必ず返礼に出向いていることが確認される。

#### (九) 明治一七年：年礼、孫女さたの誕生祝い、敬三の永續嗣子祝い

『明治十七歳一月 同 一八一年一月ヨリ五月至日誌』と表記された日誌には、明治一七年一月から明治一八年五月までの日誌が収録されている。同日誌より明治一七年初頭の出来事をみると、一月一日は「戸長役場及小俣学校年礼」。二日は「敬三村内寺院年禮ス商店宴會」と、村内最寄りの寺院(無量院、長福寺、鶏足寺、醫王寺等)への年礼に敬三を遣わしており、また木村商店の新年宴會もおこなっている。三日は「午前十一時足利町より相場小泉桑名三氏年禮ニ来臨午後三時帰車ス」。「桑名」とは医師の桑名俊良である。四日は「葉鹿村大前村年礼敬三致ス」、翌五日も「敬三ヲシテ足利市中年礼致ス」と、両日にわたって敬三を葉鹿村、大前村、足利町の年礼に遣わしている。六日は「午前八時和洋舎へ年禮馳走ニなる相場氏同伴猿田村小泉氏へ年禮ニ罷出馳走ニナル」。その日の夜は「商店へ卸祝宴夜八時過余モ宴會へ出張ス」。八日は「足利町より小泉吉太郎小関東作両氏年始来臨ス」。九日は「内田全作年始ニ来ル」。一〇日は銀

行に出勤の途次「五十部村川島長十郎宅へ年始ニ立寄」。一日は栃木本行へ行く途次「佐野町正田氏へ立寄年禮ス馳走ニナル」。二日は栃木本行に勤務。翌一三日は「安生氏等年禮イタス」。「安生氏」は、かつて共に学区取締を務めた安生順四郎である。その後「栃木本行株主總會及利益金配當相濟夜ニ入社員一同宴會」と株主總會が行われ、夜は社員一同で新年宴會が開かれている。翌四日は栃木町を出発、足利支店において「午後五時過〆支店社員一同へ賞與金配附：後テ宴會ヲ開キ午後九時過散會」。翌一七日は「午前十時出車新宿常見清弥氏へ年始及預り金談判數刻馳走ニナル」。常見清弥氏は銀行の大切な顧客だったようで、毎年、株主總會終了後、逸早く年札や相談等に赴いている。

従前は一月に銀行関係の祝宴や業務があり、木村家の祝宴等は二月に入って行っていたが、この年は一月二日に「新年宴會及孫女さた子誕生餅家内一同商店一同へ配ル」と木村家（商店）の新年宴會と孫女さたの満一歳の誕生祝いをおこない、誕生餅を家内一同商店一同に配っている。翌二二日は「小杉虚東ヲ以館林小室羽生町清水家へさた誕生餅為持遣ス序二年始致ス」と、勇三の婚禮に際して媒酌人を務めた館林の小室家と羽生の清水家に年始挨拶を兼ねて誕生餅を届けている。二三日は「藤本半次入小俣山番外 歳暮 年始 禮へ遣ス」。當時は年始と歳暮の挨拶を兼ねておこなうことが少なくなかった。二四日は「白石山房へ年始及祝旁罷出相場同席馳走ニナル」。「白石山房」とは田崎草雲の自宅兼アトリエである。「祝旁」とあるが、敬三が草雲の「永續嗣子」となったことへの祝いであろう。直前の一月一九日の日誌に、「敬三義 田崎草雲老師方へ永續嗣子トシテ遣ス相場朋厚氏媒介ス」とある。二六日は「粕川守平為歳暮来ル」。二七日は「足利銀行内田治助氏年始ニ来臨ス」。

二月に入ると二日は「足利銀行社員長 前田、今尾三氏年始ニ来臨」。七日は五十部村の「廣瀬定兵衛氏年始ニ来臨」。一二日は本庄の内田宅に行く途次「粕川氏へ年始立寄馳走ニナル」。本庄に到着した翌一三日は「内田半八郎及菊屋等へ年始ス」。粕川氏への年札の返礼か、三月一日は「粕川守平年始来臨ス」。なおこの年の二月は鉄道（東北本線）の路線の問題で九日に吉井鉄道局長、二日は井上勝鉄道局長が来足し鉄道路線の検査をおこなっている。鉄道界の大御

所を出迎え、その対応などで多忙な時期であった。それら要件の合間をぬって年札等でお互いに行き来するのも大変だったと思われる。

#### （一〇）明治一八年：木村家での祝宴、年札

『明治十七歳一月 同 一八年一月ヨリ五月至日誌』と表記された日誌より明治一八年初頭の行事をみていくと、まず一月一日は「家族一同無事健全午前八時祝宴」と家族一同無事に新年を迎えたことを祝し宴会、「午后ヨリ警察署及戸長役場其外年札イタス」。二日は「明十郎ヲ以宿内年札ス」。従前は敬三を代理に年札に遣わしていたが、敬三は前年一月に田崎草雲の養子となったので、四男の明十郎を代理に近隣の年札に遣わしている。明十郎は名前の通り明治一〇年生まれで、この頃は八歳頃になっており年札をも務め得る年齢に達していた。五日は小俣分署の剣術場の開所式で酒宴を開いている。六日は「正午過出車蓮岱草雲翁へ年禮馳走ニナル午後郡長へ年禮し同夜典舗へ泊ス」。七日は「午前八時荻原氏及須永へ年禮ス」。その後、栃木本行に向かう途次「佐野町正田氏へ年禮ニ立寄」。一日は栃木本行で「株主總會午後六時宴會ス社員一同」と株主總會と新年宴會をおこなっている。翌一二日は足利支店に戻り「夕刻〆社員一同へ賞与遣ス後宴會」。一四日は「新宿村常見清弥氏へ年禮ニ罷出」。一六日は銀行勤務終了後「和洋舎年禮ス草雲老人同席馳走ニナル」。一七日は銀行勤務終了後「同夜典舗新年宴會」と木村商店で新年宴會、家族、使用人、知人等一〇人程が参集している。翌一八日は「足利町今尾氏年禮ニ来臨」。二二日は「島根縣藤川公甲府中田氏等へ年始答禮状及返書差出ス」。半兵衛の日誌をみると、年始状は年明け三日頃に書いて投函していたが、これは年始状に対する返書で、この時期になったのであろう。「島根縣藤川公」とは、かつて栃木県令を務めた藤川為親で、その後島根県令に転出していた。甲府の中田氏は北猿田の小泉兵八郎の二男、和二郎が養子に行った先の中田正兵衛である。二三日は「夕刻安田銀行支店へ年禮ニ罷出馳走ニナル中島氏同行」。

二月に入り、二日に「商店店卸夜ニ入宴會」が行われるが、「余ハ出席セズ」とある。半兵衛はすでに一月一七日に店舗の新年宴會を行っていたからである



う。三日は「糟川守平 年始 歳暮 トシテ来臨同夜泊ス」。なお糟川家では同月二三日に莊一郎が若干三五歳で死去する。当時、莊一郎は恐らく重篤な病状にあり、守平の来臨もそうした状況の報告も兼ねてのことであつたと思われる。三月七日には「鏡女実家足利町小杉氏へ年禮ニ遣ス」。「鏡女」は小杉虚東の三女で木村家の養女となった人物であり、実家に年礼に遣わしている。一〇日は「五十部村岡田啓助及川島長十郎氏等へ年始ニ罷出ル」。一日は「單身獨歩北猿田村小泉氏へ年始ニ罷出ル同村高瀬喜三郎氏長四郎三氏等へ年禮ス」。北猿田村の三氏には毎年年礼に出向いている。一八日は「夜八時過助戸村木村浅七養子國三郎年始ニ来リ泊ス」。二三日には「大原阿部氏宮繕家作地見分ニ出張序ニ加藤氏阿部トモ年始致ス」。阿部氏は家を新築中でその見分も兼ねて年始挨拶をしている。二七日には「五十部村岡平氏へ年始ニ立寄」。「岡平」は岡田平兵衛の略記である。四月八日には「敬三代理トシテ助戸村木村浅七氏へ年禮ニ遣ス」。五月三日には「長勝太郎氏年始ニ来臨ス」と五月に入っても年礼がみられた。

以上、半兵衛の日誌を資料に毎年の年頭の諸行事についてみてきたが、元日の国旗掲揚、学校や事務所等での総年礼、銀行開業後は一月中旬に栃木本行で株主総会と新年宴会、翌日に足利支店での新年宴会、その後、木村家（商店）での新年宴会、そして年礼（年始挨拶）でお互いの家を行き来することが四月、場合によっては五月に入ってもおこなわれていた。仕事等の合間をぬって、あるいは通勤の途中におこなわれる年礼は実は大変だったと思われる。また直接訪問しての年礼が不可能な遠隔地等には年始状を書き送る慣行も明治初期に成立していたことが確認された。なお当時は新年を迎えて三カ日（半兵衛は一月三日）に年始状を書き投函していた。なお元日に国旗を掲揚したり、門松（松飾り）を飾る等の正月風景は、現在ではほとんど見られなくなった。

## 二．年中行事（国の祝日、宮中行事）

木村半兵衛の日誌には、国の主要な行事（祝日）、宮中行事等が日誌の本文中や欄外に記されている。明治九年一月三〇日の日誌には「○孝明天皇御祭日御國旗竿頭ニ揚ぐ輝々タリ」とある。孝明天皇は天保二年（一八三一）七月二

に二日、仁孝天皇の第四皇子として誕生、明治天皇の父にあたり、慶應二年（一八六七）一月三〇日の崩御。明治七年（一八七四）から明治四五年（一九一二）まで一月三〇日を宮中祭祀の一つとして「孝明天皇祭」が挙行されてきた。ただし孝明天皇祭については、半兵衛の日誌では、明治九年に記述がみられるのみで、以後の日誌には記載がない。次に二月一日の「紀元節」については、半兵衛の日誌には毎年記されている。

### （一）二月一日 紀元節：…当日の日誌の欄外に「紀元節」と記載

国の祝日でも、四大節といつて四方拝（節）、紀元節、天長節、明治節の四つは特に重要である。「四方拝」とは元日における宮廷行事のひとつで、天皇が元旦早朝に神嘉殿南庭で伊勢の神宮、山陵及び四方の神々を遙拝する最初の行事である。「紀元節」は『日本書紀』による「神武天皇即位の日」として旧暦一月一日、新暦（太陽暦）に換算すると二月一日になる。明治政府は明治五年（一八七二）に二月一日を「紀元節」として制定、大正三年（一九一四）以降、全国の神社で紀元節を祝う祭りが挙行されるようになり、民間でも「建国祭」と称して祭典をおこなってきた。戦後、「日本国憲法」の精神から昭和三年（一九四八）に廃止されたが、昭和四一年（一九六六）に「建国記念日」と称して復活、現在に至っている。「天長節」は一月三日、明治天皇の誕生日を祝う祝日である。「明治節」は、昭和二年（一九二七）から昭和二年（一九四七）まで、明治天皇の誕生日に相当する一月三日に制定されていた。それまで日本の祝日は四方拝、紀元節、天長節の「三大節」であつたが、「明治節」を加えて「四大節」となった。

木村半兵衛の日誌においては、明治八年の二月は学区取締として栃木への出張や学校巡回等で多忙であつたためか「紀元節」の記述はないが、翌明治九年の二月一日の日誌には「○十一日紀元節 晴和白日天下泰平雄進開化ノ端ヲ表リ」とあり、極めて祝意を込めて紀元節を記している。翌明治一〇年の二月一日の日誌にも「○〇十一日映晴無風國旗飛揚皇風謹拝ス」と各家で国旗が風に翻っている様子が記され、同日欄外に「紀元節」と記されている。○印は

慶事を表しているが、○が二個も記されている。以上、明治九年と一〇年の日誌には、祝意を込めた紀元節の様子が日誌に記されていたが、翌明治一一年以降は当日欄外に「紀元節」との記述があるのみである。すなわち明治一一年二月一日の日誌には「夜中ヨリ降雪不止」と天候の記述のみで同日欄外に「紀元節」と記されている。翌明治一二年も二月一日に「休日ナレトモ都合ニ寄銀行へ集會ス」とあり、同日欄外に「紀元節」と記されている。明治一三年の二月一日も「曇天午后二時頃小雨夜ニ入雨降」と天候の記述のみで同日欄外に「紀元節」と記されている。なお同年の四月三日の欄外にも「紀元節」と記されているが「神武天例祭」の間違いである。明治一四年、一五年、一六年の日誌、いずれも二月一日の欄外に「紀元節」と記されているのみである。明治一七年は二月九日に鉄道会社社長吉井友実の来足、鉄道路線調査など鉄道の問題で奔走していた最中でもあつてか二月一日に紀元節の記載もない。明治一八年は二月一日の欄外に「紀元節祭り」とのみ記されている。

紀元節は戦前における国の主要な祝日であり、各家では国旗を掲揚し、学校では式典等も挙行されていたであろうが、半兵衛の明治一一年以降の日誌では、銀行業務等多忙だったこともあろうが、当日の日誌の欄外に「紀元節」の記載があるのみで、紀元節を祝して酒宴等を開いたなどの記述はない。

### (二) 三月二日 春季皇靈祭(春季祭)

戦前は、三月二日は春季皇靈祭、九月二三日は秋季皇靈祭が斎行された。それらの日は、元来は「お彼岸」で先祖を祭る日であり、またお彼岸に最も近い戌の日は、社日として氏子が氏神たる神社に参詣し、春は五穀豊穡を祈り、秋は実りある収穫に感謝する習わしがあった。それが明治一一年(一八七八)、それまでの歴代天皇や主たる皇族の忌日を春と秋に纏め奉祀するようになった。明治四一年(一九〇九)九月一九日制定の「皇室祭祀令」で春季皇靈祭・秋季皇靈祭とも大祭に指定された。同法は戦後、昭和二年(一九四七)五月二日に廃止、以後も宮中では従来通り春季皇靈祭・秋季皇靈祭が挙行されている。現在は三月二日は「春分の日」、九月二三日は「秋分の日」となっている。

右記の経緯より、木村半兵衛の日誌においては明治一一年までは「春季皇靈祭」の記載はないが、明治一二年の日誌の三月二日の「欄外」に「春季祭」という記述が初めて登場している。翌明治一三年、一四年の日誌には春季祭の記載はないが、明治一五年、一六年の日誌には三月二日の日誌の欄外に「春季祭」、明治一七年の三月二〇日(二一日の間違いであろう)の欄外に「春季祭」と記されている。明治一八年の日誌では三月二日当日は子どもたちの「種痘」で多忙だったためか春季祭の記載はない。春季皇靈祭は、半兵衛の日誌にもせいぜい当日の欄外等に「春季祭」との記載があるのみで、全く記載のない年も少なくなかった。春季祭は主に宮中における行事であり、国民の生活には大きな関わりは希薄だったと思われる。

### (三) 四月三日 神武帝例祭(神武天皇の崩御日)：祝賀の酒宴を開催

神武帝例祭は、初代天皇である神武天皇の崩御日にあたる四月三日に毎年挙行されている。神武天皇の崩御日は、『日本書紀』によれば紀元前五八六年三月一日であるが、これをグレゴリオ暦に換算して四月三日としている。幕末の孝明天皇の時代、万延元年(一八六〇)三月三十一日に神武天皇の御陵祭として始まり、明治三年(一八七〇)三月一日、神武天皇御祭典が神祇官で執行され、以後恒例となった。(明治四年(一八七一)九月には「四時祭典定則」で制定され、明治四一年の「皇室祭祀令」で改めて法制化された。同法は昭和二年(一九四七)五月に廃止されたが、以降も宮中祭祀として存続している。この「神武帝例祭」は、戦前においては極めて重要な行事だったようで、木村半兵衛の日誌には明治八年以降、毎年、四月三日の欄外等に「神武帝例祭」ないし「神武大祭」等の記載があり、当日は学校も休業日であった。まず明治八年の日誌では、四月二日に「明三日神武皇上御祭典ニ付桐生市今二日立祭國旗幟植立ス」と、翌日の祭典に備えて国旗掲揚の準備をおこない、当日の四月三日の日誌には「映晴微風國旗揚々タリ」と人々が国旗を掲揚して祝賀の様子が記され、当日の「欄外」に「神武帝例祭」と記されている。翌明治九年の日誌には同日欄外に「神武帝祭日」とある。翌明治一〇年の日誌には四月三

日の日誌中に「神武帝御祭日」とある。翌明治一一年の日誌には、前日の四月二日の日誌に「神武帝御祭典明三日ニ付餅春 白米三斗」と祭典を祝つて前日に餅つきをおこなっている。そして翌三日当日の日誌に「神武天皇御祭日」とある。明治一二年の日誌では、四月三日「後一時頃川上鈴木出半余勇三五人祝酒娛樂ス」と、神武大祭を祝してであろう、酒宴を開いており、当日欄外に「神武大祭」と記されている。明治一三年の日誌では四月三日の欄外に「紀元節」と記されているが、「紀元節」は神武天皇が即位した二月一日であり、崩御日と異なる。半兵衛の勘違いであろう。明治一四年の四月三日の日誌には「御祭典神酒馳走ス客来長四郎三 川上廣樹 鈴木折三 小泉兵八郎 木村半五郎 都合五名ナリ正午十二時過分開筵午後五時過一同退散」とあり、神武祭を祝賀して酒宴を催したのである。そして当日欄外に「神武祭 日曜」と記されている。明治一五年四月三日は、半兵衛は東京で病氣療養中であつたが、当日欄外に「神武大祭」と記されている。翌明治一六年の日誌にも同日欄外に「神武大祭」、明治一七年の四月三日は、直前に本庄の内田老翁が亡くなり、前日の二日は葬送等で多忙だったためか、三日当日の欄外に「大祭日」とのみ記されている。明治一八年の日誌の当日欄外には「神武祭」と記されている。このように「神武帝例祭」は、毎年の日誌の本文や欄外に祭日の記載があり、神武大祭を祝賀して酒宴を開いた年もあるなど極めて重視された祝日であつた。

#### (四) 九月二三日 秋季皇靈祭(秋季祭)

春の春季皇靈祭とともに秋の九月二三日は、現在は「秋分の日」となっているが、戦前は秋季皇靈祭がおこなわれていた。そして春季皇靈祭と同様、明治一一年(一八七八)に、それまでの歴代天皇や主たる皇族の忌日を春と秋にまとめて奉祀するようになった。そうした経緯は木村半兵衛の日誌にも反映している。すなわち半兵衛の明治一〇年までの日誌には何の記載もないが、明治一一年の日誌の九月二三日に初めて「秋氣皇靈祭 休業」と記されている。そして当日は銀行は休業日で「安田忠兵衛 三輪 益子 遠藤 余 六人酒宴ス」と銀行関係者六人で皇靈祭を祝してであろう、酒宴をおこなっている。翌明治

一二年の日誌には当日欄外に「秋季皇靈祭」、明治一三年の日誌にも当日の日誌本文中に「秋氣祭」、当日欄外に「大祭」と記されている。明治一四年の日誌も、当日欄外に「秋季祭」、明治一五年の日誌の当日欄外にも「秋季皇靈祭」とのみ記されている。明治一六年は、九月二三日は太田金山等に参詣に出掛けていたためか秋季祭の記載はない。明治一七年の日誌は当日欄外に「大祭 秋季祭」、明治一八年では、秋季祭前日の九月二二日の日誌に「明廿三日秋季祭ニ付社員一同へ酒肴馳走ス 肴三色 酒貳升」とあり、当日の日誌に「秋季皇靈祭」と記されている。秋季祭を祝して前日に社員一同で酒宴を催している。このように秋季皇靈祭については、ほぼ毎年、当日の日誌本文中や欄外に「秋季祭」、「秋季皇靈祭」等の記載があり、それを祝して酒宴を開いた年もあった。

#### (五) 一〇月一七日 神嘗祭：五穀豊穰を祈り感謝する宮中行事

「神嘗祭」は「かんなめのまつり」「じんじょうさい」等と訓じ、宮中祭祀のひとつで大祭である。「祭祀令」では皇室の祭祀が大祭と小祭に分けられており、大祭には一月三日の元始祭、二月一日の紀元節、春分の日、春季皇靈祭、一〇月一七日の神嘗祭、十一月二三日の新嘗祭などがある。大祭は天皇みずから祭典をおこなった。ところで「神嘗祭」の「神嘗」とは「神の饗(あえ)」が変化したと言われる。「饗え」は食べ物でもてなす意味である。五穀豊穰の感謝祭にあたり、宮中および伊勢神宮等において、その年の初穂を天照大御神に奉納する儀式がおこなわれる。明治六年(一八七三)の太陽暦採用以降は新暦の九月一七日に実施となったが、その時期は稲穂の生育が不十分なため明治一二年(一八七九)以降は月遅れとして一〇月一七日に実施されるようになった。現在でも宮中および神宮では従来通り神嘗祭が行われている。

右記の経緯は木村半兵衛の日誌にも反映している。すなわち明治八年の日誌には九月一七日正午に「足立 内田 川上 大島 杉野 松本 拙々七人〇当日新神嘗祭ニ付祝酒山木屋ニオイテ催ス午後一時退散」とあり、学区取締や学校教員等、総勢七人が地元の料亭山木屋で神嘗祭の酒宴を開催している。翌明治九年の九月一七日は、半兵衛は学区取締会議に参加しており「神嘗祭」の記

載はない。明治一〇年と一一年も九月一七日頃は第四十一国立銀行の設立開業や業務等で多忙を極めていたこともあつてか神嘗祭の記述はない。

明治一二年の日誌では、九月一七日に「秋季祭銀行休業ス全クハ十月十七日改正之よし」とある。「秋季祭」とあるが「神嘗祭」のことであろう。従前は九月一七日であつたが、その時期では稲穂の生育が十分ではないことから明治一二年より一〇月一七日に変更、そのことも日誌に「全クハ十月十七日改正之よし」と記されている。ところで同年の九月一日の日誌には「本年仲夏より土用前後本日ニ至近年無比ノ順良候田畑トモ此分ナレハ大豊作ナルベシ」とあり、さらに九月二八日の日誌にも「順氣良候ナリ弥々豊作無疑必ス田方充分ノ收穫ナルベシ」と、気候も良好で豊作が期待されることが記されている。そして一〇月一七日の日誌には「新嘗祭休」と記されている。翌明治一三年も、九月一七日の日誌に「美映晴好順氣候真ニ豊年ノ兆」と豊作が期待されることが記されている。ただし一〇月一七日は半兵衛は上京中でもあつたためか「神嘗祭」の記載はない。明治一四年も建具の入れ替えや来客等で多忙だったせいかな神嘗祭の記載はない。明治一五年は一〇月一七日の欄外に「神嘗祭」と記されており、前日の一六日に足利「銀行ニおいて午後五時祝宴ヲ開キ…」とあるのは神嘗祭を祝しての酒宴と思われる。明治一六年は一〇月一七日の欄外に「秋季祭」と記されているが「神嘗祭」のことであろう。明治一七年の一〇月一七日は庭の手入れ等もあつてか神嘗祭の記載はなく、明治一八年は一〇月一七日の日誌の欄外にただ「祭日」とのみ記されている。神嘗祭のことであろう。

ところで稲穂など農作物の豊凶は、その年の気候に左右される要素が大きかったが、昔から九月一日は「二百十日」、九月二〇日は「二百廿日」と称され、暴風雨の時期で農家にとっては「厄日」とされていた。半兵衛の日誌にも明治一〇年、一二年、一六年の日誌の当日欄外に「二百十日」、「二百廿日」の記載があり、毎年のように九月から一〇月にかけて暴風雨に襲われている。明治一一年の九月一五日の日誌には「傾盆風雨猛烈ナリ」とあり、明治一二年の九月一四日の日誌には大雨で「渡良瀬川五尺ノ出水ナリ」とある。明治一三年の一〇月三日の日誌には「午前三時頃ハ暴風雨本年第一ノ風雨」とあり、明治一四

年の九月一三日の日誌には「夜十二時頃より暴風雨トナル」、明治一五年の八月五日は「洪水ノ模様アリ」、同年一〇月二日の欄外には「出水諸川満水」、明治一六年の九月一三日は「嵐模様折々降雨吹込甚し」、同年一〇月八日の日誌には「本年第一等無比ナル暴風雨渡良瀬及桐生川等出水四合余」、明治一七年九月一五日には「明治元年己来無比ノ大洪水也」、同日欄外には「大風 洪水 大嵐」とある。こうした暴風雨によつて農作物が被害を蒙ることもあつたと思われる。

その年の農作物の豊凶は、特に農民をはじめ国民にとつても重大な問題であり、農作物の豊穰を祈り感謝する神嘗祭の意義は極めて大きかったと言わなければならない。ただし半兵衛の日誌をみていくと、明治八年は明確に神嘗祭を祝して酒宴を開いており、明治一五年も神嘗祭前日の銀行での酒宴も神嘗祭を祝してのものであつたと思われるが、全く記載のない年も少なくなかつた。「神嘗祭」の祭典自体は主に宮中の行事であつたことによると思われる。

#### (六) 十一月三日 天長節：当日は学校関係者を中心に祝宴

天長節は、明治天皇の誕生日を祝う祝日で四大節のひとつである。「天長」とは『老子』七章の「天長地久」に由来する。明治元年（一八六八）九月二日（旧暦）に初めて「天長節」として祝つたが、明治六年（一九七三）、太陽暦採用後は一月三日に変更された。一月三日は明治天皇崩御後に平日とされたが、崩御から一五年後の昭和二年（一九二七）に「明治節」として休日とされた。戦後、昭和二年（一九四六）一月三日に「日本国憲法」が公布（施行は翌昭和二年五月三日）され、現在は「文化の日」となっている。

ところで「天長節」は、明治時代においては国民にとつて極めて重要な祝日だったようで、木村半兵衛の明治八年以降の日誌には毎年一月三日は必ず「天長節」と記されており、その日はたいがい祝宴が開かれている。まず明治八年一月三日の日誌には「天長節休暇」と記されており、当日は学校等も休日であつた。その日に酒宴をおこなつたとの記述はないが、同年二月七日の日誌に「夜 天長節 紀元節 村社祭 右合宴闔家一統へ酒肴ヲ進ム」とある。すなわち天長節、紀元節、村社祭の三つの祭りを合わせ一家で酒宴を行ったよう

である。翌明治九年の十一月三日の日記には「学校教員川上氏始小使二至一同へ祝酒山木樓ニおあて宴會ス」とあり、同日欄外に「天長節」と記されている。

当時は木村半兵衛も学区取締を務めており、地元の小俣小学校の教員たち学校関係者一同と地元の料亭山木樓で酒宴を開いている。明治一〇年十一月三日の日記は「〇〇三日天長節」とあるが、当日は家の修築等で多忙だったためか酒宴等の記載はない。ところが翌明治十一年の十一月三日の日記には「天長節祝酒山木樓ニオイテ催ス客来ス午後一時〆川上小里鈴木森山石直山藤近藤弥市

(桜井 星野 欠席 余外ニ学校小使一人合十人午後五時散去ス」とある。すなわち川上広樹、小里仁等の小俣学校教員、鈴木は医師の鈴木折三であろう、森山謹一郎、石井直兵衛(石直)、山藤六右衛門らは小俣村の戸長など要人である。総計一〇人で山木樓で酒宴を催している。明治十二年の日記でも十一月三日は「祝筵ヲ催ス且黄金盃ヲ相開キ客来ハ足利杉野氏 川上氏 鈴木 洪井

初傳 石直 須良 森吉 小里 勇三 余 松本操貞 合十二人ナリ外ニ女客ハ出半いし 大川おち 鈴木家内 利兵衛妻ひさ合四人午後五時宗退散ス」と盛大に酒宴を開いており、同日欄外に「天長節」と記されている。杉野直浩は足利小学校の校長であり、川上広樹、洪井祐賢、小里仁は小俣学校の教員である。初山伝右衛門、石井直兵衛、須藤良平、森山吉蔵らは村の要人、女性も含めて総勢一六名で宴会を開き、賞与された黄金盃を披露している。黄金盃の授与がよほど嬉しかったようで、同年十二月二日にも「大川雲平氏深沢織之助ヲ招キ黄金盃ヲ以馳走ス」と黄金盃を披露している。明治十三年の日記も、

当日は「晴良天氣終日清静真ニ大祭日好機ナリ祝酒川上鈴木小泉出半余勇三松本操貞七人ナリ快樂ノ酒宴ナリ」と酒宴を開いており、同日欄外に「天長節」と記されている。宴会に参集している顔ぶれも従前とほぼ同じである。明治十四年は、当時、半兵衛の家族も病氣療養中であつてか、当日の欄外に「天長節」と記されているのみである。明治十五年は当日の日記に「午後一時頃〆川上鈴木洪井石直出半ヲ招キ酒宴ス余勇三外松本操貞氏奏曲午後五時頃一同退散」とあり、同日欄外に「天長節」と記されている。すなわち従前同様、小俣学校教員や村の要人を中心に天長節を祝って酒宴を開いている。明治十六年は、前日

の十一月二日は「孫女きみ誕生餅春夫々へ配与ス本家及商店一同へ配ス」とあるように、孫女の誕生祝を行ったばかりであるためか翌三日には祝宴を開いた様子はなく、欄外に「天長節」と記されているのみである。明治十七年の十一月三日の日記には「同日午時川上洪井丸山石直四氏ヲ招キ馳走ス」とあり、同日欄外に「天長節」とある。従前どおり小俣学校の教員や地元の有力者四人で天長節を祝って酒宴を催している。なお当時は大勢の人足たちが地元小俣村の道路工事を行っており、同日の日記の続きに「村道路人足四百余人へ酒一駄肴菜煮シ浸祝酒遣ス」と工事に携わった人足たちにも酒肴を振舞い慰労している。明治十八年の十一月三日の日記には「午後三時後〆観菊宴ヲ開キ草雲翁荻野老翁荻原氏相場小泉等ナリ助戸浅七氏ヲ招キ生憎出京中不來甲府和二郎氏來着ス午後八時一同退散ス」とあり、当日の欄外に「天長節」とある。天長節を祝い、かつ鑑菊会を兼ねて自宅に大勢を招いて酒宴を催している。

年中行事のなかでも神嘗祭など主に宮中の行事は、欄外等に簡単な記載のみが多いが、「天長節」のみは、ほぼ毎年、教員や村の要人等を中心に盛大な酒宴が開かれて、特に重要視されていた祝賀行事であつたことがうかがわれる。

#### (七) 十一月三日 新嘗祭

新嘗祭は「にいなめさい」、「しんじょうさい」と訓じ、その年の稲の収穫を感謝し、きたるべき年の豊穰を祈願する祭儀である。天皇が神嘉殿で新穀を天神地祇に供え、その恩恵に謝すとともに自らも食する儀式を行うもので、宮中の恒例祭典のなかで最も重要な儀式である。宮中のほか伊勢神宮や出雲大社でも行われる。古くは陰暦一月下旬の卯の日におこなわれたが、明治六年(一八七三)以降は十一月二三日に定められ、戦後は多くの神社でも行われるようになった。昭和二十三年(一九四八)からは「勤労感謝の日」として国民の祝日となっている。なお天皇即位後初めて行う新嘗祭を大嘗祭という。

木村半兵衛の日記をみると、明治八年から一〇年までの日記には新嘗祭の記載はなく、明治十一年の日記の十一月二三日に初めて「新嘗祭銀行休業」との記述が登場している。その日は銀行も休業であつたが、半兵衛は行用で栃木本

行に赴いている。翌明治一二年の日記には一月二三日の欄外に「日曜 神嘗祭」と記されている。なお同年の一〇月一七日の日記に「新嘗祭休」と記されており、正しくは逆であるが同趣旨の行事であるため混同もみられる。明治一三年は一月二三日の欄外に「新嘗」とある。なお当日の日記に「東京〆祝物持車夫重吉安着ス」とあるが、二月九日の二女とよの婚儀の祝儀と思われる。明治一四年は、半兵衛が大病に罹り、一月二三日は東京で医師の診療を受けての帰途にあり新嘗祭の記載はない。明治一五年も、当日は上京中であり、明治一六年も、当日は富岡製糸場を縦覧中であり等で新嘗祭の記載はない。明治一七年も明治一八年も新嘗祭についての記載はない。このように半兵衛の日記を通覧すると、国の祝日のなかで新嘗祭については何の記載もない年が多い。祭典自体は宮中の行事であり、国民生活との関連は薄かった故と思われる。

#### (八) 学校休業日となった祝祭日

以上、二月一日の紀元節、三月二日の春季皇霊祭、四月三日の神武天皇祭、九月二三日の秋季皇霊祭、一〇月一七日の神嘗祭、十一月一七日の天長節、十一月一七日の新嘗祭等の行事について、半兵衛の日記にはどのように記載されているかをみてきた。右記の行事のうち、天長節のように日記に毎年記載され、かつ祝賀の酒宴等が催されている行事もあれば、神嘗祭や新嘗祭など主に宮中の行事で国民の生活との関わりは薄く、せいぜい日記の欄外等への簡単な記載のみか、全く記載されないケースも少なくなかったものもあった。

ところで右記の行事は学校祭日にも位置づけられていく。半兵衛の明治七年の日記(『學務雑誌』)に「十二月五日出縣學務會議 同八日足利町逗留 學校祭日 生徒參校 教頭助教一同出席禮受ノ」一月一日 四方拝 二月十一日 紀元節 十一月三日 天長節」と記録されている。(九)すなわち元日の四方拝、二月十一日の紀元節、十一月二三日の天長節の三つは最も重要な学校祭日で、当日は教員・生徒全員登校して式典を挙ることとされた。さらにその後、右に挙げられている国の祝日、宮中行事は学校の祝祭日として定着していくこととなる。山本信良氏は、福井県の小学校規則等を資料に学校休業日の変

遷について表に整理しているが(一〇)、それによると、正月を中心とする冬期休暇、夏季休暇、学年末休暇、毎週日曜日の休暇以外に国の祝日が休日になっている。祝祭日については明治六年一月に政府が五節旬の行事を廃止し、新たに同年一〇月に元始祭、新年宴会、孝明天皇祭(一月三〇日)、紀元節、神武天皇祭、神嘗祭、天長節、新嘗祭を祝祭日と定めている。さらに明治一二年六月に春季皇霊祭と秋季皇霊祭が祭日として追加され小学校の休業日となっている。(一一)その他、地元の氏神の祭日も休業日になっており、明治三二年以降は「勅語下賜記念日」(二〇月三〇日)、学年末も休業日となっている。

#### 三. 地元神社の祭礼等

木村半兵衛の明治八年三月二〇日の日記に「当村三ヶ日ノ間芝居興行ス」と、小俣村で三日間にわたる芝居興行の記録があるが、日記には大原神社、熊野神社、八雲神社など地元の神社の祭礼についての記述もみられる。

##### (一) 四月一六日 郷社・大原神社の祭礼

木村半兵衛の日記には「郷社」、「村社」などの言葉が登場するが、それらは明治時代に制定された神社の社格である。すなわち明治四年(一八七二)五月、「大政官布告」で神社規則等が制定され、社格制度が新たに定められた際、官社以外の神社を諸社といい、府社、藩社(同年七月の廃藩後は府県社と改称)、県社、郷社、村社、無格社等の社格が定められた。郷社は府県社に次ぐ郷邑(きょうゆう)の産土神(うぶすな)かみで、村社よりも崇敬範囲が広く、一地方にわたって広く崇敬される中心的神社で、地方官の管理下にあつて奉幣を受けた。半兵衛の日記には「郷社大原神社祭」等の記述があり、地元小俣村ではなく大前村にあつた大原神社が郷社であつたことが確認される。

大原神社の祭りは四月一六日と一〇月一六日の春秋二回行われていた。日記をみていくと、明治八年の四月一六日は、半兵衛は学区取締として管下の学校の進級試験実施のため各学校を巡回中であつたためか祭礼についての記載はない。翌明治九年の四月一六日も、当日は足利町学校で各校教頭の会議が開催、

それに出席しており、祭礼についての記述はない。しかし翌明治一〇年には四月一六日の日誌本文中に「大原神社祭り」とあり、翌明治一一年の四月一六日の日誌本文中にも「郷社大原神社祭り」とある。翌明治一二年は四月一六日の日誌の欄外に「郷社大原祭」と記載されている。しかし翌明治一三年と一四年の四月一六日は、半兵衛は上京中で地元になかったためか祭りの記載はない。明治一五年も、当日は自宅に來客があり、翌一六年も、当日は銀行検査等で多忙であり、明治一七年も当日は銀行勤務後、桑名俊良医師の診療を受けており、明治一八年も当日は自宅に來客があったり等で、欄外等にも大原神社の祭礼についての記述はない。このように全く記述のない年が多く、記述があっても極めて簡単で、祭礼の様子等についての記述はない。所用等で、半兵衛自身が祭礼を実見したり、祭礼に参加することはあまり無かったものと思われる。

## (二) 四月二五日 村社・熊野神社の祭礼

先述したように明治四年（一八七一）五月制定の神社規則によると、村社は郷社よりも社格は下で地方（村）の氏神として仰がれる神社であった。多くは村の鎮守の社などが列格され、社掌が置かれていた。終戦の昭和二〇年（一九四五）に、この社格制度が廃止された当時、全国約一萬社のうち村社数は四萬四九三四社あり、寺院全体の約四割を占めていた。小俣村の村社は熊野神社で、大永六年（一五二六）二月の創立と伝えられているが、天保七年（一八三七）九月に再建されたとされている。

木村半兵衛の日誌によると、毎年四月二五日と一〇月二五日の春秋二回、村社、熊野神社の祭りがおこなわれている。春季の四月二五日について半兵衛の日誌をみていくと、明治八年の四月二五日は、当時学区取締として進級試験実施のため各学校を巡回中であり、祭りについての記載はない。翌明治九年は、四月二五日の日誌本文中に「小俣村村社祭り」と記されている。なお同年四月一八日は「松田学校へ巡回該校村社祭ニ付休校」とある。すなわち松田学校を巡回したが、当日は松田村の神社の祭礼のため休校だったと記している。当時、村社祭礼の日は学校は休校だったようである。翌明治一〇年の四月二五日は、

自宅の庭の植樹等で多忙だったためか祭りの記載はない。明治一一年は四月二五日の日誌文中に「熊野神社祭り」と記されており、明治一二年は四月二五日の日誌の欄外に「村社祭」と記されている。なお祭日ではないが、同年の三月三日の日誌に「十二時過川上氏供ニ熊野神社へ登山ス」と、小俣学校の教員川上広樹と一緒に熊野神社を参詣している。明治一三年から一五年までの三年間は、四月二五日はいずれも上京中で地元におらず、祭りの記載はない。明治一六年も当日は栃木本行に出張中で祭りの記載はない。明治一七年は四月二五日の日誌の欄外に「村社祭」と記されている。明治一八年は、四月二五日の日誌に「午前六時村社祭熊野神社へ参詣ス」と、村社祭当日に熊野神社を参詣している。なお同年二月一五日の日誌にも「正午川上氏ヲ招キ祝宴ス午後同氏余明十郎供ニ熊野山上登リ神社参詣充分遊歩数時間ニシテ帰宅」とあり、祭日ではないが小俣学校教員川上広樹、明十郎らと三人で熊野神社を参詣している。なお同日欄外に「旧正月元日」とあり、旧正月を祝って酒宴を開き、熊野神社にも参詣したのである。以上、半兵衛の日誌を通覧すると、祭礼当日の四月二五日に地元に住なかったり、多忙等で全く記載のない年もあったが、祭礼日当日の日誌本文中や欄外に「村社祭」等の簡単な記載があり、また地元の小俣村にあった神社であるためか時折参詣もしている。ただし祭礼の模様等についての記述はない。

## (三) 七月下旬～八月 八雲神社の祭礼：盛大な祭礼の様子が記述

郷社大原神社と村社熊野神社の祭礼については、当日の日誌の本文や欄外等に祭礼の記載がある年もあったが、祭礼の様子についての記述はなかった。ところで七月下旬から八月にかけて桐生町や栃木町等で八雲神社の祭礼が行われており、祭当日は屋台や神輿が繰り出されたり、芝居や手踊り等が催されるなど賑やかな様子が半兵衛の日誌に記されている。八雲神社は、社伝によると貞観一一年（八六九）に清和天皇の勅定により素盞鳴男尊（すさのおのみこと）他二神を祀ったのが始まりという。一方、日本武尊が東征の際に出雲大社を勧請したという伝承もある。平将門の乱の際には藤原秀郷が戦勝祈願し、前九年



の役および後三年の役の際には源頼義と源義家が戦勝祈願している神社である。

## ①人々のエネルギーが教育以外の諸興行に傾注される状況を嘆き戒める

半兵衛の日記をみていくと、まず明治八年八月二三日の日記に「桐生町八雲祭禮アリ手踊芝居興行」と隣の桐生町の八雲祭礼で手踊りや芝居興行など実に賑やかな模様を記しているが、続けて「該町学校新築ノ噴発力モナク如新規ノ祭事長大息」と記されている。祭りは盛大で賑やかであるが、人々のエネルギーが「学校の新築」など教育の振興に向けられず、祭事など諸興行ばかり注がれている状況を「長大息」と嘆息しているのである。

明治五年（一八七二）の「学制」頒布後間もない当時は、学校の開校や就学奨励など国として教育に極めて力を入れていた時期であり、木村半兵衛も学区取締として教育振興に尽力していた時期であった。当時、半兵衛は学区取締として月一回、栃木町の師範学校で開催される学区取締会議に出席していたが、明治七年三月六日に開催された会議には「原公」、すなわち学務係原弘三が出席、「諸興行之儀ニ付今般別紙之通戸長副江相達候条項其定向後猶従前二因襲シ学事を差置キ興行致候向も有之候ハ、其趣書取ヲ以可申立此旨相達候事」（二）と演述、人々が教育を差し置いて諸興行にばかりエネルギーを注いでいる状況を問題視している。その背景には同年二月十七日付、栃木縣令鍋島幹による次のような布令が出されていた。

「學校擴張スル之儀當今之急務ニ候処往々心得違より学事を閑キ諸興行物等ニ身ヲ入候族も有之候甚不都合之至ニ付向後疊舎設立不致各区者勿論縦令開学相成居候とも且保續之小費を厭ヒ彼是苦情申唱候様成ル場所ハ興行願出候節於戸長ニ篤と説諭を加へ願書差戻し候様可致此旨相達候事」（二）

すなわち人々が教育の振興を疎かにし、芝居など諸興行にばかり熱中している状況を嘆息し戒めているのである。半兵衛の日記においても、全般的に地元神社の祭礼等に関しての記述が極めて簡単で、祭礼の様子についての記述があまり無かった理由も、そもそも祭礼を実見することもなかったこともあろうが、何よりも先ず教育の振興に尽力すべき学区取締として、右

の布令に示されているような捉え方が基本にあったからとも考えることができる。翌明治九年の日記では、八月一五日は「○當村八雲祭禮ナリ」と地元小俣村での八雲祭礼が挙行、さらに八月二三日は「桐生町八雲祭禮ナリ」と記されているが、記述も極めてあっさりしている。翌明治一〇年は半兵衛は八月六日に銀行開業の用件で栃木町の県令宅等を訪問、当日の日記に「栃木町八雲祭禮賑力ナリ」と、栃木町の八雲祭礼の様子を日記に記している。

## ②明治一一年、地元小俣村に八雲神社が建立され盛大な祭典が挙行される

明治一一年四月一日の日記に「村内八雲神社上棟」とある。小俣村にはまだ八雲神社が無かったようで、この時に八雲神社が上棟されたようである。したがって明治一一年の夏は、地元村での八雲祭礼が盛大に挙行されたと思われるが、この時期、半兵衛は国立第四十一銀行の設立に向けて県内各地を奔走しており、地元にはいなかったためか祭礼についての記述はない。しかし翌明治一二年の八月六日の日記には「村方八雲祭禮ニ付家臺ヲ出し芝居アリ」とある。

「家臺」とは屋台のことで、村方が屋台を出して芝居もおこなわれるなど賑やかな祭礼の様子が記されている。（三）また二日後の八月八日の日記には「村方神輿廻ス」と、神輿も繰り出されている。翌明治一三年も、八月一日の日記に「炎暑如燃」と猛暑日であったが、「当村八雲神社祭禮宵宮屋臺芝居狂言アリ」と宵宮、屋台、芝居、狂言等の催し物もあり、実に賑やかな祭礼の様子が記されている。なお八雲神社の祭禮日は年によって異なっていたようで、翌明治一四年は七月二六日の日記に「小俣村祭禮家臺出ス」と、七月下旬に祭礼がおこなわれている。当日、半兵衛は在宅中で祭礼の様子も実見したのである。翌二七日も「村祭八雲神社出ス」とあるが、神輿でも繰り出したのであろうか。

明治一五年は、八月九日の日記に「小俣村八雲神社祭目下悪疫流行ニ付神輿渡シナシ」と記されている。この年は全国的に悪疫（コレラ）が流行、栃木県内、小俣地方でも悪疫の流行で死者も多数発生しており、神輿渡しは中止されたようである。明治一六年は七月三〇日の日記に「小俣村八雲神社祭典神輿廻ル手踊一夜アリ」と、神輿廻し、手踊り等がおこなわれている。明治一七年も、八



月一六日の日誌に「小俣村八雲神社祭禮終日好天氣」とある。明治一八年は、七月二〇日の日誌に「足利五丁目己酉八雲神祭」と足利町の八雲祭礼のことが記されている。半兵衛は前年の明治一七年に足利四丁目に別宅を建て、一八年の六月下旬以降はほとんど連日、別宅に宿泊している。八月一六日も半兵衛は足利支店に勤務終了後、足利町の別宅に宿泊、足利町の八雲神社の祭礼を見分したのであろう。足利町の八雲神社は、足利通町に貞観年間(八五九〜八七七)に藤原村雄が津島神社を勧請したのが始まり、天保一四年(一八四三)本殿を改築した。このように八雲神社は各地に数多く設けられていた。

以上、半兵衛の日誌より地元神社の祭礼についての記述をみてきたが、一般的に神社の祭礼については、祭日当日の日誌の本文中や欄外に祭礼の記述がある場合が多いが、当日に所用等で地元になかったりすると記述がないことも少なくなかった。また祭礼の模様についての記述はほとんどないなか、八雲神社の祭礼に関してのみは、屋台を繰り出している芝居、手踊り、神輿廻しなど、実に賑やかな様子が日誌に記録されている。学区取締を経験した半兵衛にとつて、基本的には祭礼等より教育の振興が何より大切というところの方があつたであらうが、地元小俣村にも八雲神社が建立されて以後は、半兵衛自身も賑やかな祭礼の様子を身近に実見することが多かったことがうかがわれる。

#### (四) 一〇月二五日 村社・熊野神社祭礼

小俣村の村社である熊野神社の祭りは四月二五日と一〇月二五日の春秋二回おこなわれていた。一〇月二五日の秋季の祭礼をみていくと、木村半兵衛の日誌では明治八年から一三年までの日誌には記載がないが、明治一四年の一〇月二五日の日誌本文中に「村社祭」とある。ただし半兵衛は九月末より体調を崩しており、当日も「余終日氣分不宜」と記している。翌明治一五年の一〇月二五日は足利支店に勤務、夜も店舗に宿泊、地元にはいなかったが、当日の日誌欄外に「村社祭」と記されている。明治一六年も一〇月二五日の日誌の欄外に「〇〇村社祭」と記されている。なお同年の一〇月一六日の日誌には「郷社祭典也余在宅ス」とある。郷社大原神社の祭礼も春秋二回行われていたが、秋季

の祭礼についての記載はこの年だけである。明治一七年の日誌には一〇月二五日の村社祭についての記述はなく、明治一八年は四月二五日の春季祭礼日には神社を参詣したが、一〇二五日の秋季の祭礼についての記述はない。このように全く記載のない年も多く、あってもせいぜい「村社祭」との簡単な記載であり、祭の様子等についての記述はない。

#### (五) 明治一七年五月九日、小俣分署の上棟式

以上、地元神社の祭礼についてみてきたが、神社の祭礼以外でも地域での祝賀の催しはあつた。小俣村には交番所があつたが、半兵衛は、従前より警察署や交番所に対していろいろと援助をしてきた。明治九年九月二六日には警察署新築に際して一〇円を寄附し褒状を戴いており(二三)、明治一一年八月一八日の日誌には「〇警察要書十五冊 官民必携一冊 西洋品行論二冊 右小又交番所へ寄附ス」と書物等を寄贈しており、明治一四年一月一日には小俣交番所新築金として二四四円を寄付、それに対する褒状と銀盃一個を拝受しており(二四)、明治一五年一月一日には足利警察署小俣交番所用度中へ金三二六円六六銭七厘を寄附、それに対する褒状と銀盃を拝受していた。(二四)そして明治一六年に小俣の交番を分署に引き直す話が浮上、同年八月一六日には分署開所式が挙行されている。そして翌明治一七年三月二二日の日誌には「〇〇小俣分署上棟」と記されているように小俣分署の上棟式がおこなわれ、同年五月九日には分署の新築落成、開業式が盛大に挙行されている。当日の日誌に「曇天小俣分署新築落成開業式本縣分署部長代理河北アキ君足利署長伊知地君萩原君郡長佐藤君丸山君出張於分署楼上宴會村内手踊家臺等出葉鹿村分非常隊一組出張當日村中往還ノ大群衆天氣も午後分追々晴模様終日好天氣夜二入午後二時過迄家臺手踊致ス見物ハ昼中分数倍大雑踏也」とある。すなわち当日は当初曇天だったが、午後から晴天となり、「家臺」(屋台)も繰り出し、手踊りもおこなわれるなど盛大な祝典が挙行された。夜になつても群集が日中より数倍の「大雑踏」とある。そして半兵衛は、同年九月一四日に「〇小俣分署へ時計上等一箇寄附送ル」と上等の時計を寄贈している。

さらに翌明治一八年一月四日には小俣分署に剣術場が完成、当日の日記に「小俣分署剣術場開業式ニ付三本試合アリ本縣警部長折田君其外各警部出張足利梁田郡長及飯塚氏出張右一同宅へ入来酒宴ヲ催ス」と、剣道場の開所を祝して木村家で酒宴を催している。地元の治安を担う小俣交番所が分署に引き直され、立派な建物も完成したことは小俣村にとって大いに慶賀すべき出来事であつたと言えよう。

## 注

(一)『足利市歴史研究紀要第一集 三代目 木村半兵衛の日記 翻刻と解説』「学区取締」としての活動」足利市教育委員会刊 平成二三年三月

(二)「木村半兵衛の日記『明治十年一月 日記』翻刻と補注」日下部高明 麻生千明 菊地卓 阿部幸造 斎藤徳雄 足利工業大学『東洋文化 第三〇号』平成二三年一月、「同『明治十一年一月 日記』翻刻と補注 麻生千明 菊地卓 阿部幸造 斎藤徳雄 同誌第三二号 平成二四年一月、「同『第十二号 日記』翻刻と補注』麻生千明 菊地卓 伊藤正紀」同誌第三三号 平成二六年一月

(三)拙稿①「木村半兵衛の学区取締日記にみる明治初期の足利地方の教育状況——その一・学区取締の人選と教育資金（寄付金利子）の徴収活動——」足利工業大学『東洋文化 第二八号』平成二二年一月、拙稿②「同——その二・教員の派出・異動・免職、および学校開校の状況——」同誌第二九号、平成二二年一月、拙稿③「学区取締木村半兵衛の日記にみる明治初期の足利地方における進級試験の実施状況——その一・明治六年と七年の日記を資料に——」同誌第三〇号、平成二三年一月、拙稿④「同——その二・明治八年の日記『明治八年一月ヨリ同 十二月廿一日ニ至 雑記』を資料に——」同誌三十一号、平成二四年一月、拙稿⑤「同——その三・明治九年と一〇年の日記を資料に——」同誌第三二号、平成二五年一月

(四)『明治世相編年辞典』朝倉治彦・稲村徹元編 東京堂出版 二二四頁

(五)家の新築祝いのことを「わたまわし」「わだまーし」等と称した。漢字で

は「移徒・渡座」と書き「神輿の渡御」等を意味する神聖な言葉であつた。

(六)『——人と人の心を結ぶ——年賀状の歴史と話題』郵政研究所附属資料館 平成八年一月

(七)瀧澤喜平次は、弘化三年（一八四八）櫻野村（現さくら市）に生まれる。第四十一国立銀行設立の際に木村半兵衛、鈴木要三らと共に役員に就任、その後も県内の銀行経営に携わり、明治一三年（一八八〇）、那須開墾社の設立、明治二〇年、下野麻紡機械会社の設立など実業家としても活躍する。大正五年（一九一六）没、享年七〇歳。なお瀧澤氏の邸宅は、さくら市櫻野地区の旧奥州街道沿いにあり平成一〇年（一九九八）一月、栃木県指定文化財（建造物）に指定された。明治二五年（一八九二）の陸軍大演習の際に瀧澤家が明治天皇の休息所になった記念として、明治三三年（一八九二）瀧澤喜平治の雅号「鐵竹」に因んで「鐵竹堂」と名づけられた書院造風の建物が建てられた。その建物をはじめ敷地内には当時の蔵座敷、長屋門などが現存している。

(八)注（三）掲出『明治世相編年辞典』三四頁

(九)注（一）掲出書 七四頁

(一〇)山本信良著『学校行事の成立と展開に関する研究』紫峰図書 一九九九年刊 七四～六頁

(一一)注（二）掲出書 三六頁

(一二)現在、小俣町には山車会館があり、文政七年（一八二五）、内藤紀伊守信敦侯の時代に造られたという踊り舞台付きの彫刻屋台で「切妻破風」の山車が保存されている。しかもそれは三代目木村半兵衛が桐生新町から譲り受けたものと地元では言い伝えられているという。その可能性はあるが、資料的裏付けが欲しいところである。

(一三)『足利市史料所在目録 第一集 木村半兵衛家文書』足利市教育委員会 平成一七年三月 一頁

(一四)同右書 三頁